

独学のすすめ

高部英明

福沢諭吉の「福翁自伝」(岩波文庫)は明治維新前後の日本の精神史として大変興味深い。たとえば、適塾当時、諭吉は病気になって枕を探したが見つからない。気付いてみれば、自分は昼夜なく勉強し、寝るのはそのままゴロンという毎日であった。そんなエピソードがある。学問に対する情熱の感じられる本である。

彼の本では「学問のすすめ」が有名である。それをもじって、私は今日、

「独学のすすめ」

と言いたい。与えられる学問は中・高校で終わり。あとは独学あるのみ。本を読む、さらに、それから参考書(文献)へと興味を広げて行く。他の分野の人と交流する。たとえば、プラズマ若手夏の学校に出席し、同世代の人同志、問題意識、人生観など話し合うのも独学の一部である。独学により己の幅を広げ、内に多様な共鳴体を形成していく努力を続ければ、

「一木一草すべて師たらしむるは、己自身なり」

の心境となる。一木一草が語ってくれるのではなく、語らしめるのである。そうすれば、何をやっても面白い。どんな研究会に出席しても吸収するものを見つけ出せる。どうしようもない会議等でも、反面教師としての価値はある。

そして最後に、

「光あるうちに、光の中を歩め」

です。これはトルストイの小説の題ですが、内容は宗教的なもので、生ある限り、神に一歩でも近づく努力をせよ、今からでも遅くない、といった内容だったと記憶しています。私はこれを高部流に解釈し、「Never give up」のタイトルとして心に留めています。「忙しい」、「年だ」、「もうすぐ就職だし」などと、言い訳を見つけることなく、自分自身が理想とする所へ常にチャレンジしていくべし、との戒めの言葉です。

私自身、「やすき」に流されやすい人間です。そこで、自戒を込めて、これら三つの言葉をここで繰り返したいと思います。